《追悼論文》

岩上真珠の軌跡からみる戦後日本の家族社会学

――ライフコースという到達点と家族をめぐる「消失の物語」――

松木　洋人*

1．岩上先生の軌跡をたどる

事務局長（2004年～2006年）や編集委員長（2006年～2009年）を務めるなど、家族問題研究会と呼ばれていた頃から本学会の運営に多大な尽力をされてきた岩上真珠先生が、2017年に逝去された。本稿では、岩上先生の研究の軌跡をたどりながら、先生が戦後の日本社会における家族をどのように捉えようとしてきたのかを描くことを試みたい。もちろん、この試みの目的は、まずは岩上先生の研究業績を振り返って記録するというかたちで、先生を追悼することにある。他方で、1949年に生まれ、いわゆる「団塊の世代」の一員である岩上先生の社会学者としての歩みは、後述するように、戦後の日本社会における家族の歩みをどのように理解すればよいのかをめぐって試行錯誤する日本の家族社会学の歩みとともにあった。本稿の第2の目的は、この岩上先生の研究の軌跡を日本の家族社会学史における1つの事例として捉えることによって、戦後日本の家族社会学の歩みをこれまでとは異なる観点から語り直すことにある。言い換えれば、岩上先生の研究の軌跡は、「多様化」や「パラダイム転換」に注目してきたこれまでの議論とはやや異なる視点から（木戸 2010; 池岡 2016, 2017; 藤崎 2017）、戦後日本の家族社会学史を理解するきっかけを提供してくれる。なお、以下の論述では、岩上先生のお名前を、敬称を略して記述することをお断りしておく。

岩上の研究の軌跡は、大きく異なる2つの時期が過渡期をその間に挟んでいるものと理解することができる。まず、第1の時期は、「親族研究期」である。岩上が入学した早稲田大学第一文学部では、日本の親族研究の泰斗である喜多野清一、そして、当時は喜多野とともに親族研究に携わっていた正岡寛司という2人の社会学者が教壇に立っていた。岩上の研究者としての歩みは、この2人の大きな影響のもとでスタートし、1980年代前半までは、もっぱら親族研究を中心にその研究成果を発表していた。

その後、おおむね1980年代後半から1990年代初頭までを過渡期にあたると位置づけることができるだろう。これは続く第2の時期に岩上が一貫して採用することになった日本社会における家族を捉えるための新しい視点を身につけていく時期であったと考え

＊まつき　ひろと　　大阪市立大学

られる。

そして、おおむね1990年代半ばからこの世を去るまでの約20年間はいわば「ライフコース期」である。岩上の研究で現在、最もよく知られているのは、この時期のものだろうが、それは最も精力的に研究成果が発表されていた時期でもあった。この時期には、第3版まで改訂を重ねた定評のある家族社会学の教科書も刊行しているが（岩上 2003, 2007, 2013）、『ライフコースとジェンダーで読む家族』というそのタイトルにもあるライフコースという用語は、最後まで岩上の研究のキーワードであり続けた[1)]。

以下では、この時期区分を手がかりに、岩上の研究の軌跡をたどっていく。繰り返しになるが、それは戦後の日本社会における家族、そして、これらを捉えようと試みてきた家族社会学の軌跡をたどることにもなるだろう。

2．親族研究期――都市／村落・量的／質的の二分法を超える研究の模索

1）山村の親族組織という出発点

岩上が最初に公刊した論文は、早稲田大学の学部学生として参加した社会調査実習の成果を同輩の学生たちとともに報告したものである（岩上ほか 1973）。この論文は改訂されたうえで、喜多野と正岡を中心とする日本の親族組織についての共同研究の成果の一部としても刊行されている（岩上・森岡 1975）。これら最初期の論文は、山梨県の長浜という山村で「シンルイ」と「オヤコ」と呼ばれる2種類の親族組織、つまりは同族と親類の構造を詳細に描いたモノグラフである。後に正岡（2017）も回顧しているように、この長浜の調査を含む一連の共同研究は、それまでの日本の親族組織の研究が「家」と同族組織の研究に集中していたのに対して、親類関係と同族組織の関係に注目する点に特色があり、日本の社会学が戦前から蓄積してきた親族研究の作法を継承しつつも、イギリスの社会人類学者であるR. Firth（1956）らによる親族調査の技法を新たに導入している。このため、岩上らによる長浜のモノグラフにおいても、個人を中心とした親族圏（kinship universe）の広がりを捉える試みがなされている。

ここでまず注意するべきは、当時、日本の家族社会学は、ディシプリンとして確立するプロセスが完了したばかりの時期だったということである（e.g. 森岡編 1967, 1972）。そして、よく知られている通り、このディシプリンとしての確立は、核家族をその基礎的な分析単位と措定することにもとづいていた。このことは村落における家族を主な対象とする親族研究の排除を必ずしも意味するものではなかったが、村落における伝統的な家族の研究は農村社会学が担い、家族社会学は都市部の現代的家族に焦点化するという1950年代から進行していた領域分化のもとで（池岡 2016）、家族社会学の内部では伝統的なスタイルの親族研究の周縁化が進むことになった。岩上が親族研究者としてスタートを切ったのは、このように伝統的な親族研究が周縁化された後のタイミングだったと言ってよいだろう。

当時のこうした文脈も踏まえて、もう一つ注意すべきは、親族研究期と一括してはいるものの、その後の岩上の親族研究は、すぐに村落の伝統的な家族の研究という親族研

究のありかたからの同時代的な展開を果たすということである。そして、この展開の萌芽となる問題意識は前述の論文にもすでに見いだすことができる。たとえば、長浜では多くの家族が直系家族の周期を描くことが明らかにされる一方で、それはもはや安定的に維持されるものではなく、専業農家がほぼ消失し、また、都市の吸引力が増大することによって、大都市にいったん他出したあととりが近村で農業以外の職に就くといった「意識的な作業」が直系家族の周期を維持するには必要になったことが指摘されている（岩上・森岡 1975: 148）。さらに、外部社会の浸透や生活圏の拡大によって、長浜の「家」は共同関係の範囲を縮小させ、「家」の成員はムラの枠組にとらわれず、より任意的に関係の範囲を拡大するだろうと述べたうえで、「家」を基本的単位とするシンルイ、つまり同族集団は「消滅していく方向をたどると予想される」と締めくくられている（岩上・森岡 1975: 185）。つまり、親族研究者としてスタートを切った岩上が早速、直面したのは、戦後の日本社会の構造変動に伴って、村落における「家」の存続は自明のものでなくなり、それを単位とする同族組織という親族研究の主要な研究対象そのものが消滅に向かっているという現実だったのである。

2）都市親族への関心

村落における「家」とそれが構成する親族組織のこのような現実は、伝統的な親族研究とは異なる研究対象を選ぶことを岩上に迫るものであったと考えられる。しかし、岩上は少なくともこの時点では、村落社会における「家」から都市部の現代家族へという二項対立のもとで、単純に前者から後者に研究対象を変更することは選ばなかった。そのかわりに選ばれたのが、都市親族を研究対象にすることだったのである（岩上 1976, 1978, 1984b）。

この都市親族への注目は、前述した村落社会の「家」と都市部の現代家族という二分法が、当時の家族社会学において前提とされていたことへの批判的な問題意識に支えられている。たとえば、岩上（1976）においては、東京都世田谷区のなかでも住宅地になってからの歴史が浅い地区と戦前から住宅地として整備されていた地区にそれぞれ居住する3つの家族の事例をとりあげて、個人によって認知されている親類の範囲やその認知の詳しさの程度を検討している。現代的な観点からは、取り上げられている事例のうち、最も少ない事例でも130人、最も多い事例では351人の親類が認知されていること自体、特筆に値するだろうが、論文の要点は2つの地区の比較にある。具体的には、きょうだい、おじ・おば、おい・めい、いとこによって媒介される親類への認知が、前者の事例では続柄によって規則的になされるのに対して、後者の事例では同じ年齢の子どもがいたのでよく夏休みに遊びに行っていたといった個別的な経験に応じて任意になされることなどが指摘されている。また、前者の事例においても、子どもの世代から加わった親類に対しては認知が極端に少なく、実際のつきあいもほとんどなくなっていて、息子がとりむすぶ新たな親類圏がかつてのように重要な「家」と位置づけられていないことから、この親と子の世代が「『家』と現代家族の2つの親類関係の大きな転換期にあたっている」（岩上 1976: 83）と論じられる。このような事例の検討をふまえて、

「ひとくちに都市の家族といってもその実態は実に多様であり、都市家族が全て夫婦家族を制度化しているとする前提が修正されねばならぬ」(岩上 1976: 83) と主張されているように、村落社会の「家」から都市部の現代家族への単純な移行を想定することが繰り返し批判の対象になっている (岩上 1976, 1978, 1984b)。

これら一連の都市親族研究を特徴づけているのは、それがいくつかの意味で、農村を対象とする伝統的な親族研究との連続性をもっているということである。第 1 に、岩上は農村でフィールドワークをするなかで、農村における親族構造を解明するためには、都市への他出者を調査する必要があることを確信するようになったという (岩上 1978)。このことは、都市の家族の側からすれば、その多くが本人や親の代に農村からの移動を経験しているため、「家」の親族イデオロギーと無縁ではないことを意味する (岩上 1978)。世田谷区での調査にもとづく研究において、親世代が農村出身の事例を取り上げたり (岩上 1976)、都内出身者とそれ以外の者で親族の認知や接触頻度を比較したりしていることは (岩上 1984b)、まさにこのような問題意識の延長線上に位置づけられる。そこにあるのは、農村から都市への大規模な人口移動が続くなかで、日本の親族体系が農村と都市にまたがって大きく複雑なものになっていることへの関心である (岩上 1984b)。

第 2 に、最初期のモノグラフでも取り上げられていた 2 種類の親族組織のうち、「家」の系譜関係にもとづく同族はほとんど関心の外に置かれ、個人による認知を通じて成立する親類に焦点が当てられている。このことは、伝統的な親族研究からの断絶であるようにも思えるが、先述のように、喜多野と正岡がある時期から親類に強く関心を注ぐようになったことを受け継ぐものと理解することもできる (cf. 喜多野・正岡編 1975; 岩上 1984a)。そして、最初期のモノグラフの共著者であり、その後に日本の都市社会学におけるネットワーク研究のパイオニアとなった森岡清志 (2013) が、喜多野らの下での親族調査の経験を振り返りながら述べているように、同族が集団を形成する内的契機をもつがゆえにネットワークとは呼べないのに対して、親類への着目は、個人を中心に広がるネットワークとして親族を捉えることにつながるものであった。

そして、この点が第3の連続性に関わっている。すなわち、岩上の都市親族研究は、個人による親族認知や親族との相互行為や親しさに注目する点で、明示的に言及されることは少ないものの、Firth (1956) などによる社会人類学的なネットワーク研究からの影響がより顕著になっている[2)]。他方で、当時、ネットワーク分析を取り入れて進められてきた都市親族の研究の多くは、都市の家族・親族を村落の家族・親族との対比でそこから離脱するものととらえてきたために、農村の親族研究の豊富な遺産を受け継ぐかたちでなされてはいないというのが岩上の認識であった (岩上 1984b)。実際、自身の研究における事例記述は (岩上 1976, 1984b)、喜多野や正岡らの親族論も参照しつつ (e.g. 喜多野・正岡編 1975)、伝統的な親族研究のモノグラフと同様のスタイルで行われている。「数量的把握」では親族の構成までは示すことができるが、「質的側面、すなわち親族構造の分析まではなし得ない」ので、「大量観察とインテンシブ調査との二段構えのアプローチ」が必要であるとも述べられているように (岩上 1976: 86)、これら

の研究で模索されていたのは、いわゆる質的調査と量的調査の垣根を超えながら、伝統的な親族研究のスタイルとネットワーク論の分析手法とを融合することだったように思われる。

しかし、結果として、この模索は模索のままで終わることになった。岩上は自分が目指していたような親族研究を、日本の都市における親族ネットワークのモノグラフとして結実させることのないままに、都市親族について研究成果を発表することはなくなる[3)]。むしろ岩上の関心は、およそ1980年代後半から、現代家族を捉えるためのより新しい視点を摂取することに向けられるようになったようだ。岩上の研究者としての過渡期の始まりである。

3．過渡期――新たな視点の確立に向けて

過渡期に発表された研究は、大きく2つにわけることができる。まず、親族研究期の延長線上に位置する研究がある。J. Boissevain（1974=1986）による社会人類学的なネットワーク研究の翻訳や農村家族の調査にもとづく岩上（1987）がそれに該当する。後者の論文は、喜多野が戦前からフィールドとしていた山梨県の大垣外を舞台として、農村の家族が家産の継承、あとつぎの結婚難、単身や夫婦のみの高齢世帯の存在などの問題に直面していることを描いている[4)]。農村におけるこのような問題の存在は、「家」を単位とする同族による相互扶助が困難になっていることを意味するものであり、フィールドこそ異なるが、最初期のモノグラフで予想されていた同族集団の消滅が、さらに近づいていることを確認するような結果になっている。ただし、事例の記述に親族研究の語彙があまり用いられなくなっているという点では、最初期の論文とは一線も画している。

次に、過渡期の後に到来するライフコース期の前触れとなる研究がある[5)]。たとえば、農村における「家」の相続人のライフコースを分析した論文がある（岩上 1986）。これは、前述の岩上（1987）と同様に、大垣外での調査にもとづくものであるが、家族イベントを経験する年齢を出生コーホートによって比較したり、イベントの経験の順序や間隔に注目したりする点において、明確にライフコース論の視点からデータ分析が行われている。日本におけるライフコース研究の実践例として、かなり早いものの1つだろう。

他にも、この時期の岩上（1990, 1992）は「時間」概念を媒介にしながら、家族研究にとってのライフコース論の意義に何度か言及している。しばしば指摘されるように（池岡 2016, 2017）、日本の家族社会学は1980年代から転換期に入り、画一的な家族モデルを設定することの問題が認識されるようになるなかで、集団としての家族から個人に分析単位をシフトするライフコース論が注目を集めていた（e.g. 森岡・青井 1987）。岩上の関心がライフコース論に向けられたことも、このような動向の反映であるだろう。さらに、岩上（1992）においては、共働きや子どもをもたない夫婦、非婚や未婚の人々などを例に挙げながら、家族の多様化や個人化に言及されていること、そして、近代家族における性別役割分業の限界が指摘されていることに、ライフコース期と同様の

視点がすでに認められる。そして、やはりこのような家族変動やジェンダーへの視点も、池岡義孝（2017）が家族多様化説と近代家族論が手を組んでいたと振り返るような当時の家族社会学の動向を反映するものである。言い換えれば、親族研究期の岩上が周縁から出発して、その後も家族社会学の主流とは一定の距離を置きながら、独自のスタイルを模索していたのに対して、この時期から岩上の研究は、ライフコース論の導入や近代家族論の登場という家族社会学というディシプリン全体の動向に竿をさすものになっていった。

このような“転向”の理由は必ずしも判然としないが、過渡期に入る少し前に執筆された『家族問題の社会学』（青井監修・湯沢編 1981）の書評からは、当時の岩上の問題意識のありようをうかがい知ることができる。この書評の冒頭で、岩上（1982: 62）は「われわれに行動基準と安定性とを保証していた伝統的な家族モデル（核家族モデルをも含めて）とそれを支えていた家族規範は、事実においてつぎつぎと挑戦をうけているが、一方ではそれに代る新たなモデルをもちえず、また夫婦・親子をめぐる家族規範に関して、家族員相互の、あるいは家族間のコンセンサスを見出しえないでいる」と述べている。この記述と同時期の岩上の研究内容を重ね合わせれば、村落の「家」から都市の夫婦家族へという図式を自分が批判の対象としているあいだに、都市部を中心に家族の変容はさらに進んで、そもそも夫婦家族制を前提にしたり、核家族をモデルとしたりすること自体が難しくなっているという認識が浮かび上がってくる。後になって岩上（2008a）は、1970年代までの家族研究者の関心の根底には、たとえ否定的な対立軸であるにせよ「家」があったが、1980年代に転換点が訪れたと振り返っている。つまり、この時期から、「『近代家族』モデルが無効化するなかで、『家』と『近代家族』という2つの家族集団モデルを対峙的に扱うことによって成り立っていた家族変動の基本的枠組みが消失」し、家族が「個人」をベースに語られ始めたという（岩上 2008a: 184）。そして、この個人化する社会に対応する理論枠組みとして位置づけられているのがライフコース論である。このように、親族を研究しながら岩上が抱えるようになった問題意識と、個人を分析単位としつつ、家族にアプローチするための分析枠組みとしてライフコース論を摂取しようとする家族社会学の動向とが、ある時期から重なり始めたということだろう[6)]。

ともあれ、この過渡期に身につけたライフコース論の視点を活用しながら、岩上は1990年代半ばごろから、精力的に研究成果を発表するようになる。このことは1990年代以前にはどちらかと言えば寡作であったこととは対照的であり、岩上が研究者としての過渡期を経て、その基本的な足場を確保したことを示しているだろう。次節では、このライフコース期における研究について検討しよう。

4．ライフコース期――個人化社会における家族モデルの限界

1）家族研究の対象としての「若者」の発見

岩上の研究の軌跡において最大のエポックとなり、また、最もオリジナリティに富

み、現在まで最も頻繁に参照されているのは、宮本みち子と山田昌弘らと共同で行った若者の親子関係についての調査研究の成果だろう（宮本・岩上・山田 1997）。よく知られていることではあるが、これらの研究は、高学歴化や晩婚化に伴い青年期から成人期への移行過程が長くなることによって、「脱青年期」という新たなライフステージが登場しているという見かたを提示するものだった。この脱青年期は「就職して給料を得るようになってからも、親からのさまざまな援助を受け続け、成人としての役割と自覚の不完全な状態」として描かれ、それを生きる「シングル貴族」たちは、「早く一人前になって、親を楽にしてあげたい」という時代から「親にしてもらうのは当然」という時代への転換を読み解く鍵であると捉えられていた（宮本・岩上・山田 1997: ⅱ–ⅲ）。具体的には、持続的な経済成長のもとで所得の上昇と資産形成を経験してきた親世代が子どもと同居する期間が長期化するなかで、子世代の多くは母親に身の回りの家事をゆだねていること、親から子への経済的援助が見返りを期待せずに行われていること、子世代は親を扶養する気でいるが親世代は子どもに自らの扶養を背負わせることへのためらいが強いことなどが明らかにされている。

このような議論は、これまでの親子関係の研究が、幼い子どもと親の「子育て」を通じた関係と高齢期の親と子どもの「介護」を通じた関係に集中していたのに対して、中年期の親と若者の子どもとの関係、そして、そこにある「自立」をめぐる問題に焦点を当てたという意味で非常に新鮮なものであり、大きな注目を集めることになった。実際、マスメディアや一般読者からも著者らを驚かせるほどの関心を引いたようで（宮本・岩上・山田 1997: ⅰ）、山田（1999: 11）が「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」を「パラサイト・シングル」と命名したことは、若者が経済停滞や少子化などの“元凶”としてバッシングされる1つのきっかけにもなった（宮本 2002）。これに対して、宮本（2002）は、深刻な経済不況と就職難に直面する若者の成人期への移行を支援する包括的な政策を確立する必要性を主張して、その後は、国や地方自治体の施策形成にも関与するようになる（宮本 2017）。

そして、この時期に、岩上（1999）は、出生動向基本調査独身者調査の分析にもとづいて、親と別居する傾向は20代から30代の未婚者のうち高学歴、専門・管理職、高収入の者に強く、「シングル貴族」が独身生活を謳歌しているという現象が裏づけられるのは、本人と親が高学歴、母親が専業主婦の者に親との同居が多い大都市に限られることを明らかにしている。「シングル貴族」が大都市中流階級にみられる「特殊な」傾向であって、未婚者の親との同別居には階層差と地域差があることに注目している点で、宮本と同様に、自分たちの当初の議論を軌道修正するものであると言ってよいだろう。実際、岩上は21世紀以降も、宮本との共同研究を継続しながら、若者という研究対象をさらに追求することになるが、そこでしばしば焦点が当てられているのは彼らの「自立」の困難である（岩上編 2010, 2015）。

たとえば、最初に宮本らと行った若者の親子関係についての調査は、1991年から92年に東京都府中市と長野県松本市で20代の若者とその親世代である50代を対象に行われたが、それからおよそ10年後の2001年から2003年には、比較を目的として、同じ地

域で同じ年代の人々を対象とした調査を行っている（岩上編 2010）。これらの調査の成果を受けて、岩上（2010a）が強調するのは、学校から仕事への移行、生殖家族の形成、親元からの離家などの若者の「自立」のプロセスがより個人の裁量に任せられるようになった一方で、若者たちによる「選択」は階層、ジェンダー、居住する地域などの構造的な制約を受けてもいるということである。さらに、2007年から2010年にかけては、日本・韓国・イタリア・カナダの4ヵ国の若者のキャリア形成のありかたを比較する調査が行われているが（岩上編 2015）、岩上（2015）は、日本の女性は初職と現職ともに非正規雇用に就く者が男性に比べて多いという特徴があること、また、日本は収入のジェンダー差が4ヵ国でもっとも顕著であるにもかかわらず、女性は男性ほど「高い収入を得たい」と思っていないことなどを明らかにしている。労働市場におけるジェンダー格差や性別分業意識の根強さによって、特に日本社会においては女性の「自立」が困難であることを示唆する知見である。このように、若者の「自立」へのプロセスが個人化している一方で、親や本人の資源の多寡によって生じる格差があること、にもかかわらず、「個人化社会」においては、そのような格差が個人の「選択の結果」としてみなされることへの問題意識が、21世紀以降の岩上の若者研究を特徴づけている（岩上 2010a: 186）[7]。

以上のような岩上の若者研究への継続的な取り組みは、岩上が親族研究期から培っていた伝統的な家族モデルを前提にすることの限界という問題意識と、その限界を乗り越えるために個人を分析単位とするライフコース論の視点を摂取していたという過渡期の経験を踏まえれば、それらの自然な帰結として理解することができる。つまり、長期化する未婚子の親との同居は、夫婦家族制のモデルが想定する軌跡をたどらない家族のありかたの1つの典型であり、ライフコース論の視点からは、それを青年期から成人期へというライフステージの移行の問題として捉えたうえで、その移行のありかたが世代やジェンダーなどの個人が置かれた社会的位置によってどのように異なるのかが注目されることになる。言い換えれば、若者の「自立」という主題は、社会が個人化するなかで、「われわれに行動基準と安定性とを保証していた伝統的な家族モデル」が挑戦を受けると同時に、「それに代る新たなモデルをもちえず、また夫婦・親子をめぐる家族規範に関して、家族員相互の、あるいは家族間のコンセンサスを見出しえないでいる」（岩上 1982: 62）という問題意識を社会学的な分析として具体化するうえで恰好の主題だったのである。

2）「団塊の世代」との伴走

この若者研究とならんで、岩上のライフコース期、特にその最後の10年間に、研究のもう1つの軸となったのは、自身もその当事者である「団塊の世代」と彼らが経験している中年期や高齢期というライフステージへの注目である（岩上 2008a, 2008b; 岩上・鈴木・森・渡辺 2010）。岩上らが若者やその親子関係について行った調査のうち、2001年から2003年に行われた調査は、若者の親世代として「団塊の世代」をその調査対象に含んでいたが、この調査を境として、岩上は「団塊の世代」およびその前後の世代が

中年期から高齢期へと差しかかりつつあることに関心を向けるようになる。

岩上が「団塊の世代」について論じ始めた2000年代半ばには、この世代は50代後半であり、親の介護を経験すると同時に、自分の老後のことも考え始める年齢になっていた（岩上 2008a）。「団塊の世代」についての社会学的考察は他にもいくつか例があるが（e.g. 天野編 2001）、岩上による議論の特徴は、そのようなライフステージにある彼らの子世代との関係に注目することにある。2001年から2003年の調査結果によると（岩上 2008a）、未婚子と同居している「団塊の世代」の多くは、子どもとの関係は良好であると評価しており、子どもとの会話も頻繁である。また、子どもの給料は子どもの自由だと考える者が多く、子どもに家事の分担を期待する者が過半数である一方で、実際には自分たちがほとんどの家事を担っている。にもかかわらず、子どもとの同居には満足しており、別居したいと考えている親は1割に満たない。さらに、子どもからの扶養や介護は8割以上の者が期待していない。ジェンダー差や府中と松本の地域差はあるものの、「世代間の資源の流れは上方から下方への一方通行」であるという意味で（岩上 2008a: 211）、1990年代初頭の「シングル貴族」の親世代とほぼ同様のイメージが浮かび上がってくると言ってもよいだろう。

しかし、このような世代間関係は、とりわけ1990年代以降に雇用が流動化するなかでは、親世代に不安をもたらすものでもある。同じ調査の結果からは、50歳代の男女の7割から8割が自分や配偶者の老後の生活費や介護・世話に、過半数が子どもの就職や結婚に不安を感じていることがわかる。そして、自分たちの老後について不安を抱えている者は、年収が低い者、暮らし向きが苦しい者に多い（岩上 2008b）。子どもには子どもの生活があると考え、適度に距離を保った関係を望みながらも、日本型雇用システムが崩れていくことによって、子どもたちがいつまでも安定した雇用に就けなかったり結婚しなかったりするだけではなく、自分たちもいつまで子どもに扶養や介護の負担をかけずにいられるかどうかもわからない。つまり、岩上（2008b）が焦点を当てる中高年期の人々の不安は、彼らが望む世代間関係を実現できるかという不安でもある。

2010年代に入ると、いよいよ「団塊の世代」は高齢期を経験し始めるようになる。岩上（2010b: 106）は「団塊の世代」を性別役割分業などによって特徴づけられる「近代家族モデル普及の総仕上げをした世代」と位置づけているが、このモデルが「老後は最終的に1人になる」ことを内包しているという問題は等閑視されてきたという。そして、高齢者の単独世帯率が上昇して、高齢期に家族がいない生活をする経験が広がっていくなかでは、つまり、「血縁やパートナー以外の「親しい人たち」が、貴重な「資源」となる社会」（岩上 2010b: 125）においては、家族以外にどのようなつながりがもてるかという「高齢期を見据えた「暮らしのコミュニティ形成」」（岩上 2010b: 121）が問われているのではないかと述べる。このような問いかけは、不安定な時代に高齢期を迎えようとする同世代の人々に対する「応援歌」（森 2010: 200）であり、旧来の地縁や血縁や社縁を超えるという「新たな発想のパイオニアでもあれかし」（岩上 2010c: 192）という期待の表現でもあった。

なお、岩上が最後に手がけた2016年から2017年にかけての調査は、30代と60代の

人々のライフコースを分析しようとするものであった。この60代の人々は、岩上（2010b）が「高度成長世代」と呼んだ世代にあたり、「団塊の世代」をそのなかに含んでいる。しかし、岩上は実際に高齢期を迎えた「団塊の世代」の生活において、彼らが抱えていた不安は解消されずに現実の困難が生じたのか、また、期待していたような新たなコミュニティ形成がどれくらい行われたのかなどを調査データにもとづいて検討することはできなかった。そして、「団塊の世代」に伴走しようとするその足取りが止まった地点が、岩上の研究者としての軌跡の終着点ともなった。同時代を研究する社会学者にとって半ば宿命づけられたこととはいえ、岩上は、まだまだ続くはずの「団塊の世代」の人々のライフコースの行く末を見届けることはできなかったのである。

5．岩上の軌跡からみる戦後日本の家族社会学――家族をめぐる「消失の物語」と家族社会学における「歴史の終わり」？

以上、岩上の研究の軌跡を概観してきたが、それは戦後の日本社会における家族がどのような変化を経てきたのかを、その都度、家族社会学の研究動向を参照しながら論じることを中心に展開されてきたものだったといえよう。最後に本節では、岩上のそのような研究の軌跡が、戦後日本の家族社会学について示唆するところについて若干の考察を試みたい。

岩上の研究は、村落の親族組織のモノグラフから始まったが、彼女が村落調査を始めた1970年代初頭には、「家」は自明のものではなくなり、それを単位とする同族組織は消滅に向かっていた。そこで岩上は、都市における親類の研究に関心を移していくことになるが、1980年代になると、今度は家族の個人化によって、村落の「家」から都市の夫婦家族へという岩上の都市親族研究で批判の対象となっていた戦後の家族変動を語る図式の失効が明らかになっていく。その後の岩上は、若者の「自立」の困難であれ、高齢期における世代間関係をめぐる不安と新たなコミュニティ形成であれ、個人化社会における夫婦家族制モデルの限界を示すようなライフコースのありかたを主題とするようになる[8)]。

こうした軌跡は、人々が抱える生活上のニーズの充足の主な担い手であることがかつては期待された親族組織や「家」、そして、夫婦家族が相次いでその期待に応えられなくなり、結果として、狭義の「家族」を超えるつながりに個人にとっての新たな生きる基盤としての期待が寄せられるようになるという日本社会の軌跡と併行するものであった（cf. 牟田編 2009）。「固定的なものがバラバラになる」という「消失の物語」を語ることが社会学の習い性になっているという岸・北田（2018: 38）の指摘を借りて換言すれば、岩上の研究の軌跡は、家族社会学の領域において、まさにこの「消失の物語」を体現するものだったといえよう[9)]。

そして、岩上の研究の軌跡を、このような「消失の物語」として捉えたとき、戦後日本の家族社会学の展開についても、従来とはやや異なる解釈を提示することが可能になる。第1に、1980年代に核家族論が支配的なものでなくなって以降の家族社会学の動向

は、しばしばその多様性によって特徴づけられてきた（森岡 1998; 木戸 2010; 藤崎 2017）。しかし、岩上が家族社会学の周縁に位置する親族研究に携わっていた時期を経て、家族社会学の動向に掉さすかたちで、1990年代からライフコースを自らの研究のキーワードにし始めたように、1980年代を境として、個人と家族の関係をどう捉えるかという点では、家族社会学はむしろ斉一性を高めたようにも思われる。たとえば、生年は1938年と約10年早いものの、岩上と同時期に研究成果を公刊し始めた目黒の研究の軌跡は、農村社会学研究から出発し、1970年代にネットワーク研究に出会ったという点でも岩上のそれと共通するところがあるが（目黒・藤村・渡辺・吉野・田渕 2011）、1980年代には彼女はライフコース研究を手がけつつ、家族の個人化論を先駆的に提唱するようになる（目黒 1987）。むろんより詳細な検討が必要ではあるものの、家族を個人の多様なライフコースの一部として捉えるという立場へのこのような収斂は、他の多くの家族社会学者を巻き込んだディシプリン全体の動向として観察できるものではないだろうか。つまり、“固まっていた家族がバラバラになる”という強力な「消失の物語」のもとで、家族を個人の多様なライフコースの一部として捉えるという立場は、1980年代に始まり、現在に至るまで、家族社会学においてかなり支配的なものであり続けているように思われる。

たしかに、このような個人と家族の関係の捉えかたにもとづいてなされる研究が、実際に何を研究対象として、どのようなデータ収集や分析の方法を用いているのかは、かなり多様ではある（e.g. 野々山・清水編 2001）。けれども、多様な個人のライフコースを分析する研究の多様性は、しばしば家族を個人のライフコースの一部として捉えるという斉一的な前提に支えられているのではないだろうか。言い換えれば、山村の親族研究という「周縁」から個人化社会におけるライフコースの研究という「主流」への移行を遂げた岩上の研究の軌跡は、家族社会学の多様化について語る場合には、家族社会学のどの位相の多様化なのかを分節化したうえで論じる必要があることを教えてくれる。

この点とも関連するが、第2に、岩上が過渡期からライフコース期に入る時期に到達した地点から、現在の家族社会学はどれくらい離れたところにいるだろうか。日本の家族社会学が、前述のように1980年代に転換期を迎えたという認識はおおむね共有されていると考えられるが、転換期から現在に至るまでの時期をどのように位置づけるかについては議論が乏しい。また、Ochiai Emiko (2013) が、近代家族論が核家族論パラダイムを相対化した後、1990年代には、ライフコース研究、歴史人口学、ネットワーク論などが担う新たなパラダイムが確立したとの理解を示している一方で、池岡 (2016) は、日本の家族社会学が1980年代から始まった長い転換期をいまだに抜け出せずにいると述べているように、この点について論じている者のあいだでも、見解が必ずしも一致していない。

このような見解の相違は、「伝統的な家族モデル」が挑戦を受ける一方で、「それに代る新たなモデルをもちえ」ていないというかつて岩上 (1982: 62) が表明していた問題意識に回答が与えられたと評価するか否かによるところが大きいだろう。岩上自身はこの問題意識のもとに、ライフコース論の視点を摂取したが、それは家族をめぐる「消失

の物語」が語られ続けて、親族組織、「家」、夫婦家族が相次いで必ずしも期待のできないものとなり、これ以上バラバラになりようがない個人（individual）が最後に残されるという物語の「結末」に達したということにほかならない。このような意味で、岩上が同時代の多くの家族社会学者たちとともに到達した場所は、「消失の物語」を語る家族社会学の終着点だったのである。そして、「消失の物語」に頼っている限り、ここにはいわば家族社会学における「歴史の終わり」がある。にもかかわらず、家族社会学がいまだに転換期のなかにあるように思われるとしたら、そこには転換期からの脱出が新たな家族モデルの出現とともに訪れるという前提があるだろう。つまり、「消失の物語」がすでに「結末」に達し、「歴史の終わり」を迎えた一方で、新たな家族モデルを求めることを通じて転換期を語ることも可能であり続けている。これが「消失の物語」を語る戦後日本の家族社会学が、20年以上も前からたどり着いていた現在地ではないだろうか。

それでは、家族社会学研究はこの現在地からどのように離脱しうるのか。あるいは、そもそもこの地点から離脱する必要があるのか。すなわち、「消失の物語」とは別様に家族を語ることはどのように可能であるのか。あるいは、そもそも別様の語りかたが探求される必要があるのか。後続の研究者にとっては、若者の「自立」や「団塊の世代」のライフコースの研究を引き継ぐことのみならず、これらの問いに取り組むこともまた、岩上が握っていたバトンを受け取ることであるには違いない。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、池岡義孝先生（早稲田大学）と田中慶子さん（慶應義塾大学）から重要なご助言をいただいた。また、岩上先生の配偶者である丸山敦朗さんからは、先生のプロフィールや研究業績などをまとめた『追憶』と題された冊子を提供していただいた。記して感謝を申し上げます。

注

1）この研究の軌跡を岩上の教育キャリアおよび職業キャリアと重ね合わせるなら、早稲田大学大学院文学研究科修士課程と駒沢大学大学院人文科学研究科後期博士課程での学生時代と非常勤講師時代を経て、1989年に明星大学で最初に常勤職を得るまでは親族研究期から過渡期にあたり、明星大学に在職中に過渡期からライフコース期への移行を果たし、2002年から聖心女子大学に籍を移した後の期間はそのすべてがライフコース期にあたることになる。

2）日本の家族社会学におけるネットワーク論のパイオニアである目黒依子（1988）は、都市家族がもつネットワークの特徴を明らかにする試みの一つとして岩上（1976）を位置づけている。ただし、1970年代の日本の家族社会学では、T. Parsonsによる「核家族の孤立」テーゼをめぐる論争が注目を集めており、そのような関心の高さを背景にして、都市部の親族ネットワークを対象にした調査研究も盛んに行われていたが（目黒 1988）、岩上は自分の研究をそのような文脈のなかに位置づけていない。このことにも岩上が、あくまで喜多野流の親族研究の文脈を引き継ごうとしていたことが表れているように思われる。

なお、その後の家族社会学においては、母親の育児ネットワークの研究（松田 2008）や家族とコミュニティの関係をネットワークの視点から分析する研究（野沢 2009）のように、親族ネットワークは個人が形成するパーソナル・ネットワークの一部として捉えられ、それ単独で焦点化されることはあまりなくなった。

3）岩上が親族を主題とした最後の論文（岩上 1984b）、つまり、親族研究期をしめくくることになった論文は、1983年に亡くなった喜多野を追悼する駒澤大学文学部社会学科の紀要に掲載されている。

4）この論文は、岩上が駒沢大学大学院時代に指導を受けていた山根常男の古稀を記念する論文集に収められている。岩上の研究における山根からの影響は、本稿では検討することができなかった論点である。

5）ただし、この過渡期だけに手がけられている研究もあり、民法と臨床心理学を専門とする明星大学の同僚らと共同で行った心身障害児（者）の親についての調査にもとづく論文などがそれにあたる（吉田・岩上・山本 1994; 岩上・山本 1995）。この研究は障害児の養育状況と援助に対するニーズなどを明らかにしようとするものだが、このような障害児家族やそのサポートへの関心は、これ以前の研究には見られず、この後にさらに追求されることもなかった。

6）岩上のライフコース論への傾斜は、同時期に正岡を中心とする早稲田大学の研究者グループが共同でライフコース研究に取り組んでいたことの一部としても理解される必要がある。たとえば、正岡（1993）は大人どうしの親子関係の長期化に注目している点で、岩上らの若者研究とも重なるところがある。

7）このような問題意識は、大学生を対象とした社会学的なキャリアデザイン教育の試みにもつながっていると考えられる（岩上・大槻編 2014）。

8）むろん、岩上の研究業績には、このような整理の範囲を越えるところもある。特に岩上（1998）で論じられているようなヨーロッパのジェンダー政策は、1990年代以降、重要な研究テーマの1つだった。

9）岸・北田（2018）は、「連帯」という処方箋の提示も社会学の習い性であると述べているが、岩上が高齢期における新たなコミュニティ形成に期待を寄せていたことは、この一例だろう。

文献

青井和夫監修・湯沢雍彦編、1981『家族問題の社会学』サイエンス社

天野正子編、2001『団塊世代・新論――“関係的自立”をひらく』有信堂高文社

Boissevain, Jeremy, 1974, *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*, Basil Blackwell.（＝岩上真珠・池岡義孝訳、1986『友達の友達――ネットワーク、操作者、コアリション』未来社）

Firth, Robert (ed), 1956 *Two Studies of Kinship in London*, Routledge and Kegan Paul.

藤崎宏子、2017「家族研究の継承と課題［3］――「対話」によるアイデンティティ模索」藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う――多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房、269-286

池岡義孝、2016「家族社会学からみる日本の社会と家族のリアリティ――家族社会学の成立と展開」池岡義孝・西原和久編『戦後日本社会学のリアリティ――せめぎあうパラダイム』東信堂、3-43

池岡義孝、2017「戦後家族社会学の展開とその現代的位相」藤崎宏子・池岡義孝編『現

代日本の家族社会学を問う――多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房、9-32
岩上真珠、1976「都市親族研究への問題と視点――東京都内における事例より」『家族研究年報』2、72-87
岩上真珠、1978「都市親族研究の問題点と今後の課題」『ソキエタス』5、19-26
岩上真珠、1982「青井和夫監修・湯沢雍彦編『家族問題の社会学』書評」『家族研究年報』8、62-65
岩上真珠、1984a「喜多野清一博士と「村・家・親族」」『駒沢社会学研究』16、3-9
岩上真珠、1984b「都市中間層の親族構成」『駒沢社会学研究』16、10-32
岩上真珠、1986「農民家族のライフコース」『比較家族史研究』1、52-58
岩上真珠、1987「農村家族における家族の問題」本村汎・高橋重宏編『家族と福祉の未来――現代家族と社会福祉への提言』全国社会福祉協議会、232-257
岩上真珠、1990「現代家族と「時間」――家族分析への新たな視角をめざして」『明星大学社会学研究紀要』10、21-34
岩上真珠、1992「現代家族の時間戦略――家族時間の個別化と共同化をめぐって」『季刊家計経済研究』13、32-39
岩上真珠、1998「オランダのパートタイム就労政策――ジェンダーとシティズンシップの視点から」『家族社会学研究』10 (2)、43-54
岩上真珠、1999「20代、30代未婚者の親との同別居構造――第11回出生動向基本調査独身調査より」『人口問題研究』55 (4)、1-15
岩上真珠、2003『ライフコースとジェンダーで読む家族』有斐閣
岩上真珠、2007『ライフコースとジェンダーで読む家族【改訂版】』有斐閣
岩上真珠、2008a「団塊世代の世代間関係――家族変動へのライフコース・アプローチ」森岡清志編『講座・社会変動　第3巻　都市化とパートナーシップ』ミネルヴァ書房、182-215
岩上真珠、2008b「中高年期の家族――新たなセーフティ・ネット構築にむけて」舩橋惠子・宮本みち子編『雇用流動化のなかの家族――企業社会・家族・生活保障システム』ミネルヴァ書房、121-144
岩上真珠、2010a「ハイ・モダニティ時代の若者の自立――リスク社会のなかで」岩上真珠編『〈若者と親〉の社会学――未婚期の自立を考える』青弓社、68-89
岩上真珠、2010b「高齢社会を生きる技法――団塊「大航海時代」に」岩上真珠・鈴木岩弓・森謙二・渡辺秀樹『いま、この日本の家族――絆のゆくえ』弘文堂、90-131
岩上真珠、2010c「〈社会の中で生きる〉ことへの問いかけ」岩上真珠・鈴木岩弓・森謙二・渡辺秀樹『いま、この日本の家族――絆のゆくえ』弘文堂、187-194
岩上真珠、2013『ライフコースとジェンダーで読む家族【第3版】』有斐閣
岩上真珠、2015「初期キャリアにおけるジェンダー格差」岩上真珠編『国際比較・若者のキャリア――日本・韓国・イタリア・カナダの雇用・ジェンダー・政策』新曜社、35-48
岩上真珠編、2010『〈若者と親〉の社会学――未婚期の自立を考える』青弓社
岩上真珠編、2015『国際比較・若者のキャリア――日本・韓国・イタリア・カナダの雇用・ジェンダー・政策』新曜社
岩上真珠・森岡清志、1975「シンルイとオヤコ――山梨県南都留群足和田村長浜」喜多野清一・正岡寛司編『「家」と親族組織』早稲田大学出版部、129-185
岩上真珠・大久保茂・粕谷誠・森悦子・森岡清志・渡辺雅子、1973「山村のシンルイと

オヤコ――山梨県南都留郡足和田村長浜の事例」『社会学年誌』14、179-272
岩上真珠・大槻奈巳編、2014『大学生のためのキャリアデザイン入門』有斐閣
岩上真珠・鈴木岩弓・森謙二・渡辺秀樹、2010『いま、この日本の家族――絆のゆくえ』弘文堂
岩上真珠・山本淳一、1995「心身障害児（者）およびその家族に対するソーシャル・サポートの研究（Ⅱ）」『明星大学研究紀要　人文学部』31、55-87
木戸功、2010『概念としての家族――家族社会学のニッチと構築主義』新泉社
岸政彦・北田暁大、2018「社会学はどこから来て　どこへ行くのか」岸政彦・北田暁大・筒井淳也・稲葉振一郎『社会学はどこから来て　どこへ行くのか』有斐閣、8-54
喜多野清一・正岡寛司編、1975『「家」と親族組織』早稲田大学出版部
正岡寛司、1993「ライフコースにおける親子関係の発達的変化」森岡清美監修・石原邦男・佐竹洋人・堤マサエ・望月嵩編『家族社会学の展開』培風館、65-83
正岡寛司、2017「社会学再考――からだ・こころ・つながりの人間科学を目指して」岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治編『変容する社会と社会学――家族・ライフコース・地域社会』学文社、277-308
松田茂樹、2008『何が育児を支えるのか――中庸なネットワークの強さ』勁草書房
宮本みち子、2002『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社新書
宮本みち子、2017「若者研究の展開――家族・仕事・社会的包摂への統合的アプローチへ」鳥越皓之・金子勇編『現場から創る社会学理論――思考と方法』ミネルヴァ書房、59-70
宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘、1997『未婚化社会の親子関係――お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣
目黒依子、1987『個人化する家族』勁草書房
目黒依子、1988「家族と社会的ネットワーク」正岡寛司・望月嵩編『現代家族論――社会学からのアプローチ』有斐閣、191-218
目黒依子・藤村正之・渡辺深・吉野耕作・田渕六郎、2011「私と社会学――目黒依子先生インタビュー」『上智大学社会学論集』35、3-33
森謙二、2010「あとがき」岩上真珠・鈴木岩弓・森謙二・渡辺秀樹『いま、この日本の家族――絆のゆくえ』弘文堂、200-203
森岡清美、1998「コメント１　家族社会学のパラダイム転換をめざして」『家族社会学研究』10 (1)、139-144
森岡清美編、1967『家族社会学』有斐閣
森岡清美編、1972『社会学講座3　家族社会学』東京大学出版会
森岡清美・青井和夫編、1987『現代日本人のライフコース』日本学術振興会
森岡清志、2013「ネットワーク論と都市社会学」『日本都市社会学会年報』31、21-33
牟田和恵編、2009『家族を超える社会学――新たな生の基盤を求めて』新曜社
野々山久也・清水浩昭編、2001『家族社会学の分析視角――社会学的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房
野沢慎司、2009『ネットワーク論に何ができるか――「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書房
Ochiai, Emiko, 2013 “Paradigm Shifts in Japanese Family Sociology”, *International Journal of Japanese Sociology*, 22, 104-127

山田昌弘、1999『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書
吉田恒雄・岩上真珠・山本淳一、1994「心身障害児（者）およびその家族に対するソーシャル・サポートの研究（Ⅰ）」『明星大学研究紀要　人文学部』30、37-58